

順序とゼロ情報

— 英語辞書の読み方 —

中本 恭平

英語学習者にとって、英語辞書は英語のことなら何でも教えてくれる(ように思われる)頼もしい英語博士であり、24時間書棚で待機している忠実な家庭教師でもある。ただし、いかに優秀な英語博士であっても、ユーザーの心の中まで読み取って、欲しい情報を自動的に教えてくれるわけではない。求める情報はユーザー自身が辞書から探し出さなければならない。本稿では、「順序」と「ゼロ情報」という観点からこの英語博士のクセを見抜いていく。

なお、本文中では代表的な学習英和辞典の1つである英和辞典Xを引き合いに出すが、他の英和辞典でも大同小異の部分が多いはずだ。

1. 順序

書名 以前『英和中辞典』は英語・日本語・中国語の三言語辞書だよ」と冗談を言ったら、真に受けた高校生がいて大急ぎで訂正したことがある。さて、英和辞典は英語→日本語、和英辞典は日本語→英語方向の辞書だということはさすがに多くの学習者に認知されているであろう。ただし、前者は英文を日本語に訳す場合、後者は英作文の場合に限って使用するというのは固定観念にとらわれたもったいない使い方だ。和英辞典については拙稿(中本 2000b, 2000c)を参照していただきたい。

アルファベット順 英和辞典の見出し語がアルファベット順に並んでいることもさすがにほとんどの学習者に認知されているであろう。しかし、複合語の場合はどうか。たとえば、sea urchin(うに)は英和辞典Xではsea から4ページ離れた season や seat などの後に載っている。もちろんsea urchinで1ユニットだという前提で引く必要がある。

同綴語 英和辞典Xの前付けの「この辞書の使い方」(以下「使い方」)には「つづりが同じでも語源の異なるもの、品詞によって発音が異なるものは別に見出

し語として立て、肩番号をつけた」という説明があるが、同綴語がどのような順序で並べられているかは不明だ。たとえば、rightは「正しい;ちょうど;権利」の意味がright¹で、そこから派生した「右」の意味がright²と後続しているが、springでは派生的な意味の「春」(spring¹)が「跳ねる;ばね;泉」のspring²に先行し、頻度順になっている。かと思いきや、likeでは「似ている」(like¹)が「好きだ」(like²)に先行している。「配列順序に一貫性がないし、『使い方』の説明とも違っている！」と青筋を立てても辞書指導には役立たない。right, spring, likeさらにはbank, schoolなどの基本語を辞書で引く機会は少ない。そこで、こういったなじみの語が「通常の」意味や用法と違って用いられていると思う場合には、まず肩番号の大きい見出しから探していこうと教えよう。

品詞 かつてある学習英英辞典は、adjectiveがnounに先行し、nounがverbに先行するという品詞名のアルファベット順を採用したが、追隨する辞書はなかったようだ。ある見出し語が複数の品詞にまたがる場合、配列順序はどのようになっているのだろうか。英和辞典Xの「使い方」には説明がないので実地調査してみよう。call(動詞「電話する」→名詞「通話」)、phone(名詞「電話」→動詞「電話する」)などの例を見る限りでは、派生的なものが後に示されるようだ。setのように動詞部分の記述が長い見出しでは、その後に名詞用法、さらにはa set smile(作り笑い)のような形容詞用法が続いていることに気づかない学習者もいる。各辞書では、見出し内で品詞が変わる場所を目立たせるくふうが施されているが、品詞の知識を前提にしていることには変わらない。品詞概念が希薄な学習者に対しては、英語博士はちょっと意地悪だ。

自動詞と他動詞 pray(自→他)、preach(他→自)と

いう例に出くわすと、この配列順序にも特別な意味があるのだろうと推測がつく。はたして派生順なのか、頻度順なのか、「使い方」に解説がないので正解はお預けだ。become, swim, walkのように自動詞用法しかないと学習者に思い込まれていそうな動詞では、見出しの末尾に他動詞用法も載っていることに気づかせたい。逆方向では、do, kill, makeなどを引かせよう。

CとU 英和辞典Xでdisorderを引くと、「混乱」は[U, C], 「騒動」は[U, C], 「(心身の)不調」は[C, U]となっている。同じ見出し内なのだから、[U, C]と[C, U]の違いは意図的なものだろう。「使い方」に解説がなくても、それぞれU > C, C > Uの意味だろうと察しがつく。ただし、どのような場合に[C]あるいは[U]になるのか、具体例にあたらぬ限りすぐにはわからない。

発音・綴り 英和辞典Xに限らず、現在市販されている英和辞典では米式→英式順が一般的だ。ただし、発音に関しては弱形と強形が併記されることがあり、onでは/an, ɔn, ən, ɔn | ɔn, ɔn/と6つ並ぶ。こんな微妙な差異は完全に無視されて、無造作に「オン」と発音される実情を鑑みると、複雑な心境になる。

語義 意味の発生順、頻度順、本義→分義順、あるいはそれらの組み合わせなど、各辞書の個性が発揮される部分である。それゆえ、それぞれの辞書の方針は「この辞書の使い方」で説明されているはずなので一読を勧める。案外気づかないのは、同一語義内に列挙される訳語の配列方法だ。たとえばsonar「ソナー、水中探知機」では後者は前者の意味を説明する形になっているが、sonata「ソナタ、奏鳴曲」では後者はふだんにしない「正式な」訳語である。一方、oftenについてはそれこそしばしば「しばしば」という文語的な響きの日本語をあてる学習者が多いが、英和辞典Xでは「よく、たびたび、しばしば」となっている。ただし、frequentlyは「しばしば、たびたび、しきりに」の順。こちらは《格式》というレーベルに合わせた訳語配列なのか？

用例 英和辞典Xでは、たとえばpromise(名詞「約束」)には

a ~ of payment

She broke her ~ to pay within a month.

She broke her ~ that she would pay within

a month.

という3つの用例が示され、動詞「約束する」では
I'll do my best, but I can't ~ anything.

He ~d to wait till we came.

He ~d that he would wait till we came.

Tom ~d the money to me.

Tom ~d me the money.

の5つの用例が示されている(一部表記などを変更して抜粋した)。これを見る限りでは、単純な構造の用例が複雑な構造の用例に先行するようだ。辞書によっては、構文が異なるごとに別の下位語義を立てているものや、コーパスを使って頻度を割り出して頻度順に並べているものもある。頻度情報が役だつのは何ととっても英語で書く場合だ。逆に英語を読んでいる場合には、隠れた構造を見抜くことが学習者に要求されるので、構造の違いを際立たせているものがわかりやすい。



どの順序で配列するかということは、複数のものを提示する場合に避けて通れない問題である。見出し語のアルファベット順のような「機械的な」配列の場合には辞書を作る側も使う側も楽であるが、語義や用例の配列などになると、辞書の編集方針が絡んでくるので、辞書を作る側は神経をすり減らす一方、使う側はその方針を見抜けないということも往々にしてありえる。辞書指導のポイントは、配列順序に重要なメッセージが込められている場合があることに学習者の注意を促すことだ。

2. ゼロ情報

「我輩の辞書に『不可能』という言葉はない」とは有名な文句だが、これを辞書学的に解釈すると、「『不可能』という語は存在するが、私の辞書には収録しなかった」となる。あるいは、「この世には『不可能』という語は存在しないので私の辞書にも収録されていない」という別の解釈も可能である。

それでは、もしある英和辞典にimpossibleという語が載っていなかったら、ユーザーはどのように解釈するだろうか。また、同じ辞書に*umpossibleが未収録の場合はどうか。本誌の読者ならば、前者は編集のミスで漏れてしまったか、あるいは何らかの理由で意図的に収録しなかったのであろうと解釈し、後者ではそもそもそんな語が存在しないからだとお

答えになるだろう。しかし、もしユーザーが英語の初学者あるいはfalse beginnerだったらどうだろうか？

中本(2000a)は辞書に明示されている情報を「明示的情報」、明示されていない情報を「ゼロ情報」と呼び、後者をさらに情報が盛り込まれている「疑似ゼロ情報」と情報が盛り込まれていない「純粹ゼロ情報」に下位区分している。仮に英語として存在する語をもれなく収録する方針の辞書があったとしよう。その辞書に収録されていない文字列(少なくともその辞書の編集時点では)「英語として存在しない」を意味する(=疑似ゼロ情報)。しかし、そんな辞書はそもそも編集不可能であろうし、少なくとも現在市販されている英和辞典には全収録をうたい文句にしているものはないので、未収録は「英語として存在しない」を意味しない(=純粹ゼロ情報)。つまり、存在するかもしれないし、存在しないかもしれないのである。

これは語に限ったことではなく、成句、コロケーション、語義、発音、綴りなどにもあてはまる。たとえば、frankly impossibleというコロケーションがimpossible, franklyのいずれの見出しにも収録されていなかったとしても、可能な結合はすべて収録するという方針の辞書でない限り、未収録は「その結合は存在しない[許容されない]」を意味しない。英語で論文を書いたり、英作文の添削などをしていくと、未収録のコロケーションの許容度によく悩まされる。解決法としては、他の辞書を総当たり式に引くか、コロケーション専門の辞書を見るか、コーパスで自ら検索してみることになる。

ところで、もしある初級の英和辞典が「初学者にとって必要と思われる〇万語を収録した」と前付けに明言していたとしよう。この場合の未収録は「初学者にとって不必要」を意味する「疑似ゼロ情報」となる。しかし、*umpossibleのように本来存在しない語も当然収録対象とはならないので、「純粹ゼロ情報」も混じることになる。

初級辞書に限らず、辞書は普通何らかの基準を設けて収録する語などを制限するので、未収録というゼロ情報は「基準を満たさなかったから未収録」と「存在しない」の2つの意味を合わせ持つ。「存在しない」も「基準を満たさなかった」に含めて考えれば、結局収録基準を満たしたか否かに収束されるの

だが、一般ユーザーにはそのような舞台裏はわからないものである。

もっとも、学習者が辞書を引くのは、多くの場合すでに目の前に英語が存在している(典型的なケースは英文を読んでいて意味のわからない語に出くわした)ときである。その語を引いて辞書に載っていないか、あるいは語は収録されているが、文脈にあてはまる意味や訳語が載っていない場合、学習者はそのゼロ情報をどのように解釈するだろうか。目の前にその語が存在しているのであるから、「未収録」=「存在しない」とは解釈しないはずだ。それでは、同じ学習者がもし*umpossibleという語が英語として存在するかどうかを調べたくて辞書を引いた場合はどうか。収録語数の少ない辞書に載っていないか、収録語数の多い辞書を引いてみる、というのなら上できだ。

語や意味などの「開いた集合」の場合には、「我輩の辞書に『不可能』という言葉はない」の解釈と同じように、通例2通りの意味を持つ。



ある辞書に収録された全項目を対象とする「閉じた集合」の場合には事情が違ってくる。閉じた集合では、辞書は「疑似ゼロ情報」をよく利用する。たとえば、名詞の可算・不可算で無表示が「可算」を、動詞の活用で無表示が「規則変化」を、形容詞・副詞の比較変化で無表示がmore, mostを伴う比較をそれぞれ意味するなどである。これらの無表示(=ゼロ情報)はすべて疑似ゼロ情報である。いわゆる上級英和辞典では、形容詞・副詞が比較変化しない場合も無表示とすることがある。この場合、無表示は2つの意味を持つ「多義的疑似ゼロ情報」となる。

見落としがちなのは、各種のregister labelsにまつわる疑似ゼロ情報である。《米》《英》などの表示がない語は米英共通に用いられる語、《格式》《略式》などの表示がない語は文体的に中立的な語を意味するなどという疑似ゼロ情報はまだわかりやすいほうだが、

trash 名詞 1 《米》ごみ

2 《略式》つまらないもの

3 《主に米略式》能なし

他動詞 《略式》1 おちこわす

2 《主に米》こきおろす

3 投げ捨てる

のような見出しに出くわすと、がぜん辞書使用の習熟度が問われることになる。

細かいところでは、U=uncountable, 他=他動詞, 反=反意語, [比較なし]=比較変化なしをそれぞれ意味するなど, 各種の略号や省略が辞書では多用される。これらは上で述べた「ゼロ情報」とは異質のものであるが, 学習者にとっては煩わしい存在かもしれない。《ギ伝》《古生》《紙》《通》《トラ》あたりになると英語教師でも煩わしく感じられるのでは?

もっとも, より大切なのは, ある名詞が「数えられない」とは何を意味するのか, なぜ比較変化をしない形容詞・副詞があるのかといった言語の本質を正しく理解することである。

参考文献

- 中本恭平 2000a. 「英語辞書の〈ゼロ情報〉は何を意味しているか」『英語表現研究』第17号. 日本英語表現学会. 58-67.
- 中本恭平 2000b. 「和英辞典の存在意義」*Random*, No.25. 東京外国語大学大学院英語英文学研究会. 47-61.
- 中本恭平 2000c. 「和英辞典はええわ」*Chart Network*, No.33. 数研出版. 1-3.

* 《ギ伝》以下の略号は, 英和辞典Xではそれぞれ「ギリシャ伝説」「古生物」「製紙」「通信」「トランプ」を意味している。

(共立女子大学文芸学部助教授)